

中林梧竹と副島種臣

明治時代に新しい書の表現をもたらした



書道の世界では知らない人はいないほど有名な
中林梧竹と副島種臣。二人は佐賀県出身で、ともに明
治時代屈指の書家に数えられます。

調べてみよう?

二人はどんな作品を残したんだろう?



(箱根松坂屋旅館所蔵)

副島種臣^{しんらん}「**初蘭**」 初／蘭／副島種臣 (ノは改行) 屈原の詩「離騷」の言葉によったものと
思われる。蘭の花をつないだ花かざりのことかと思
われます。書は、独特の造形をそな

古典を追求し、近代的に再構成した中林梧竹

「弘法筆を選ばず」ということわざがあるほど
空海^{くわいかい}(弘法大師)は書に優れていました。室町時代の
とんちで有名な一休和尚^{いっきゅうおしょう}も立派な書を残していま
す。江戸時代までは政治家や僧侶、官僚、学者などが
「書」を担っていて、専門的な「書家」といえる人はほ

のと思われる。蘭の花をつないだ花かざりのことかと思
え、墨のにじみが不思議な世界を現出しています。

とんどいませんでした。明治時代に活躍した中林梧竹^{なかばしごちく}は、書を業にした
最初の「書家」ともいべき人です。

梧竹は、1827(文政10)年に現在の佐賀県小城市に生まれました。梧
竹は、弟子をとることなくひたすら書を追求する、いわば芸術追求型の
生き方を貫きました。

明治時代、日本の書は大きく変化しました。清^{しん}(現在の中国)の新しい



(小城市立中林梧竹記念館提供)

中林 梧竹

1827(文政10)年～1913(大正2)年



(佐賀県立佐賀城本丸歴史館所蔵)

副島 種臣

1828(文政11)年～1905(明治38)年

書の流行が日本に入ってきたのです。「^{りくちゅうしょ}六朝書」と呼ばれる、新しく入ってきた古典の資料を、日本で最初に本格的に取り入れたのが梧竹でした。

梧竹は幼いころから書に親しみ、情熱を注ぎました。「書聖」といわれる^{おうぎ}王羲之をはじめとする、中国の歴代の書を学び、研究を深めました。それにもとづいた独自の解釈が作品に反映しているのです。梧竹は、王羲之の書を徹底的に習い込み、その解釈を作品表現に昇華しました。あらゆる時代の古典についても、独自の解釈にもとづき、表現に結びつけました。とりわけ梧竹の表現に見られる筆づかいや空間構成についてのこだわりは、書に生涯をかけた熱意の結晶でした。

独特の世界観を書に投影した副島種臣

一方、^{そえしま たね おみ}副島種臣の書は独創的で、見ただけでは何に倣ったのかわかりません。種臣は、漢詩を書くときには「^{そうかい}蒼海」と名のりました。しかし、種臣は梧竹のような職業的な書家ではありません。

種臣は1828(文政11)年、現在の佐賀市に生まれました。幕末には尊皇運動に奔走し、明治維新後は^{ほんそう}外務卿や^{かいむきょう}天皇

侍講^{じこう}として激変する時代を生きました。種臣は、幕末・明治期にかけての激動の日本を考える教養人として、自身の思想や志を表現するための手段として書を^{きこう}揮毫※1したのです。

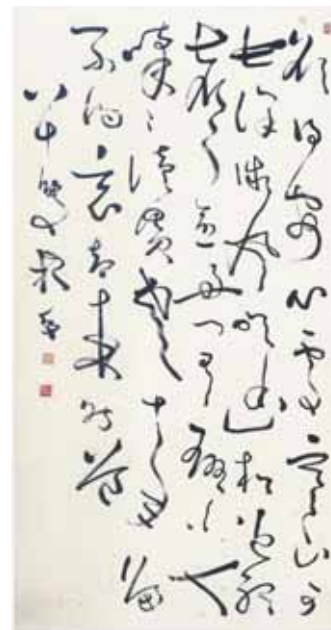
※1 揮毫とは毛筆で文字や絵を書き記すこと。

その書は常識を大きく超越した独創的なものです。これは、種臣が独特な世界観をもっていたからと言えるかもしれません。中国や日本の歴史や哲学、文学などに通じ、高い教養を備えていました。

その書に対する評価は、彼の人格に対する深い敬意と重ねて語られます。種臣は、政治家や学者が書を担うという、中国や日本において伝統的な姿勢で書に臨みました。しかし、不思議なことに、その種臣の書は、現代のわれわれにも想像できないほど、新しい表現力をもっていました。発想の源が何であるかは、現代の私たちに



劉章「耕田歌」
深耕穡種 立苗欲疏 / 非其種者 鋤而去之 / 正四位菅原朝臣種臣 (ノは改行)
漢の王族の劉章が歌った古詩を書いています。豪快で力強い筆づかいと、細くて軽やかな筆づかいの大きな落差など、まれにみる変化を見せながら、少しも計算高さを見せないところに種臣の気高く率直な人格がうかがえます。



(徳島県立文学館蔵)

中林梧竹「寒山詩」
欲得安心处 寒山可 / 長保 微風吹幽松 近聽 / 声愈好 門有斑白人 / 喃喃讀黃老 十年歸 / 不得 忘却來時道 / 八十叟梧竹 (ノは改行)
唐代の寒山という人の詩を書いた80歳の作。書は、線と線が交錯してできる空間を鮮やかに描き出し、四方八方に自在に伸縮を見せ、梧竹の草書作品の特徴をよく現わしています。

COLUMN

身近にある 種臣の書

皆さんの多くは毎日、種臣の書を目にしているのではないのでしょうか。佐賀新聞の題字は、種臣の書が使われています。



(株式会社佐賀新聞社提供) 創刊当時の題字

とっても謎に満ちています。書一筋に専念し、職業書家とも言うべき姿勢で生きた梧竹とは対照的のです。

種臣と梧竹は歳も近く、書をとおして親しく交際しました。梧竹の作品が天皇に献上されたときに、その

幹旋をしたのは種臣でした。夏目漱石の部屋に梧竹の書が掛けられていたという逸話があったり、漱石が「副島種臣の書を手に入れたが読めない」という内容の手紙をのこしていたり、彼らの書は当時から高く評価されていました。

書いた人の、書いたときの息づかいが蘇る

書の面白さは、作品をじっくり見つめていると、作者がどんな風



中林梧竹「臨周尊銘」

(小城市立中林梧竹記念館寄託)

運作／寛尊／周尊(右端)／梧竹(左端) (ノは改行) 紀元前の周代の文字を参考にして書かれた書です。鑄込まれた文字の造形を自分なりのアレンジを加えて書かれています。線の輪郭を見ると、きざむように書かれていることがうかがえます。筆はしっかり制御されていて、おおよそ同じ太さの線で、左右対称の造形を美しく描いています。

COLUMN

ファンの多い2人の書

二人の書のファンは全国に多くいます。特徴的なのは、書道以外の芸術家のファンが多いということです。

さいとうもきち あいづ やいち
斎藤茂吉、会津八一などは梧竹の書のファンでした。

しがらおや むしやのこうじさねあつ きた
また、志賀直哉や武者小路実篤、北
おおじろさんじん むなかたしこう なかがわかずまさ てし
大路魯山人、棟方志功、中川一政、勅使
かはらそうふう
河原蒼風などは種臣の書のファンでした。

ができるのです。

その点で他の芸術とは異なりま
す。書は数百年の歴史を超えて作者が
書いた瞬間が蘇る、そういう意味で、
作者とじかに対話ができる漢字文化
圏特有の装置でもあるのです。

学校の取組

【書聖中林梧竹翁顕彰席書大会】

佐賀県立小城高等学校
書道部

席書大会を盛りあげるため、会場設営から表彰式まで顕彰会の方々とともに中林梧竹の生まれた地元の高校が活動しています。



調べて書いてみよう!

二人のそれぞれの作品にどんな特徴があるのか、調べて書いてみましょう。



読んでみよう!

『中林梧竹書』 二玄社刊
『副島種臣書』 二玄社刊



出かけてみよう!



小城市立中林梧竹記念館 (小城市小城町 158-4)

梧竹の作品や遺品が展示されています。3か月に1回、展示品が入れ替えられます。
TEL 0952-71-1132 / 休館日 月曜日・祝日・年末年始 / 開館 9:00~17:00
(中林梧竹記念館提供)



佐賀県立博物館・佐賀県立美術館 (佐賀市城内1丁目 15-23)

歴史的資料や美術品が展示されています。博物館と美術館は隣接しています。
TEL 0952-24-3947 / 休館日 月曜日、年末年始、燻蒸期間及び県展準備期間
開館 9:30~18:00
(佐賀県立博物館・佐賀県立美術館提供)



検索してみよう!

梧竹デジタルミュージアム

鎮國之山

マリア・ルーズ号

致道博物館

副島の書

